大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

翻訳　ホルスト・レンツ著「エルンスト・トレルチの精神的発展の基盤　-アウグスブルク時代-」（トレルチ研究1に所収）

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2013-11-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高野, 晃兆
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007887

翻訳　ホルスト・レンツ著「エルンスト・トレルチの精神的発展の基盤　—アウグスブルク時代—」（トレルチ研究1に所収）

高　野　晃　兆*

Übersetzung von Horst Renz' "Grundlagen der geistigen Entwicklung von Ernst Troeltsch ——Augsburger Jahre——"　(in: Troeltsch-Studien 1)

Teruyoshi TAKANO*

トレルチのなじみのある，精神的な根はアウグスブルクにあった．彼の父方の先祖はこの町の出身であった．ここから彼の家族は彼の厳しい，アカデミックな人生に，誇りをもって協力し，1923年2月1日の死の時まで付き添ったのであった．

ここで彼は最初の20年間を過した．そしてその後はほぼ休暇毎に彼は帰郷し，滞在した．

アウグスブルグで彼は学校教育を受けた．そして≪都市≫という感覚的に把えられた，またひとり生き生きとした姿のくみつくされえない現実性の構造がはじめて彼の目の前に開かれたのはここであった．

この古い帝国直属自由都市〔アウグスブルグ〕にこのような関係をもちながら，彼が生誕の地として当時〔アウグスブルグの〕南門からほぼ4㎞はなれたハウンシュテェテン村しか報告できなかったということは成人になりつつある少年をひどくなやませたと言われている．

アウグスブルグの有名な商人の家系の出身であるトレルチの父は，1862年9月に，フュセン〔ドイツとオーストリアの国境の町〕の地方勤務から都市に近い，それ故希望の多いハウンシュテェテンのポストを志願し，そして同年10月20日に政府によってかの地へ招聘されたのであった[1]

旅館≪ぼだい樹≫（Gasthof zur Linde)[2] に4室の住居があった．≪母は深い愛情をもって彼のために住居を住み心地よくした．〔生活用品の〕いくつかを新しく買い，そして自分のものの多くを提供した．そして病院の賄婦リーケを彼のために家の賄婦として雇った．≫[3]

研修そのものは，その上，ゲェギンゲン，ボービンゲンとケーニヒスブルンを含んでいた．これらの地域に出かけるためにまもなく乗馬が調達された[4]

1864年5月17日に，1841年3月5日ニルンベルクに生れた医師の娘オイゲニー・ケペルとトレルチとの結婚はかの地の聖セバルドゥス教会で行なわれた．

2人の夫婦に翌年の2月17日に子供エルンストが生れたとき，ハウンシュテェテン時代がほとんど終るところであった．研修の解除の故に父はつまりすでに5月9日には，それ故エルンスト・トレルチの生誕1/4年ならずして，アウグスブルクへ移住することができた．この地で家族は最初はHaus G 332の4階に本当に狭い住居しかみつけることはできなかった[5] 彼らが喜んだのは家の裏にあって，そしてとりわけ子供に健康な遊び場となった居心地のよい庭であった．≫ ハウンシュテェテン時代については1865年2月27日にケーニヒスブルンの副牧師ペーター・J・A・アルントによって家庭で行なわれた洗礼が報告されなければならない[6] 続く数年間のうちに兄弟姉妹は5人となった．長男の他にヴィルヘルミーネー（1867年生まれ），ルドルフ（1870年生まれ），オィゲニー（1871年生まれ）とエリーゼ（1879年生まれ）であった．1875年に生まれた妹は1年少したった後亡くなった．同じく1866年に生まれた双生児は数時間しか生きていなかった．

妹が生まれると共に住居はもはや狭すぎるということになった．そこで1867年3月にHaus B 211の2階に移った．ここの1階には都市のガス照明燈施設の倉庫があった[7] ≪下の中庭に点燈夫の一団が棒に明りをつけて町へむかって出発するために集るときは，毎晩お祭りのような光景であった≫．

この住居は，フッガー御殿のすぐそばで，きらびやかなマクシミリアン通りから石を投げて届く距離にあり，モーリツ教会と武器庫のそばにあったので，≪すばらしい青春時代の本来の場所≫となった．弟ルドルフの詳細なそして愛情に満ちた叙述によれば，家具を含めた部屋の状況とそこで起こった生活が本当に明確に表現されている．ここではトレルチの自伝的なスケッチから知られ

1990年4月9日受理

*一般教養科（Department of General Education）

ている解剖学的図解にも出くわす[8] —— いくらか一般的でない叙述であるが —— :≪小さい控えの間にショーケースがあった，このケースに父はアルコールづけのは虫類とガラスにはいった胎児を保管していた……

居間はわれわれ子供には同時に勉強部屋でありまた遊び場であった．ここの家具から子供のファンタジーでもって列車，汽船或いは小屋がつくられたときは，ここの家具はひっくりがえっていた．この部屋で家庭でのお祭り，クリスマスや他のお祝いが行なわれた．ここで日曜日の夕方伯父カールと伯母ドラが招待された．親しい医者の家族が輪番で毎月のお茶の会に集った.≫[9]

家族が近くのヴェストハイムで過した1869年の避暑中に父によって独力で組立てられたすばらしい≪ヴェストハイムの家≫ができあがった．≪このすばらしいおもちゃは父によって息子エルンストのために考えられたものであったが，次には同程度に下の兄弟たちも喜こばせた．これは避暑地の農民の住居の馬小屋や農作業小屋をふくめたそっくりのコピー ——内部装置の点でも—— である．それは樹々を伴いまた農地もある庭園の自然に近いコピーである．一番大きなテーブルは非常に大きく，すばらしいことごとを陳列する場所が十分にあった．多くの祝日と祝典の時間がわれわれ子供たちのためにこのような遊び ——後にはリスの丘やビール貯蔵室と森林公園もかりだされる ——をとり入れることによって楽しくされた！ 田園や美しい自然に対する父の喜びがわれわれの子供の肉や血となるとき，その配列の豊かなコンビネーションの可能性によって子供のファンタジーをたえず新しく刺激するこの独特なおもちゃに感謝しなければならないであろう.≫

父が1874年から75年の年の変り目に，静脈炎を煩った後、回復のかなり長い時間を家で過ごしたとき，厚紙から彼の器用な手でもう一つ別のおもちゃがつくられた：≪当地のエリアス・ホル〔建築家1573・2・26—1646・1・6，初期バロック建築の巨匠，アウグスブルクの市庁舎は彼の作品〕の設計した市庁舎の1/2mの高さの忠実なコピーを父は記憶と家族の報告に支えられて創ったのであった．彼は家族を再三現場へ送って，建物のこの点やあの点をよく見てそして彼に報告させたのであった.≫

一連のこういう発達を促進するおもちゃの最後を飾るために，1878年のクリスマスの贈り物が想い出されるように：≪兄エルンストに再び特別によく考えられた，父の計画に従って建具屋によってつくられた贈物が持ちこまれた．つまり注意深くつくられたいくつかの建築用石材，つまりいくつかの半円アーチ，いくつかの柱のはいった二つの箱が持ちこまれた．これらの半円アーチや柱によって最もむつかしい古典建築の模型を1/2mの高さにつくることができ，また形のセンスをたえず実り豊かなものにすることができた.≫

年代記の数行を詳細に引用するのは形のセンスの教育について述べる ——これはそのように推測されるようにするが ——ことではない．ここではとりわけ家族の生活と父の明らかに大いなる器用さを子供たちのために役にたたせたい　　専門化された医師としての仕事が彼にこのことを許すかぎりで ——という父の教育方法に特別な光があてられている．

父は人気のある医者で，彼の仲間のサークルのなかで優秀でそして指導力があり，ついに1893年≪宮中顧問官≫のタイトルをさづけられ，極貧の患者に対しても全く当然のこととして救助の手をさしのべたのであるが，この父がトレルチの発展にとっていろいろな意味で非常に重要な役割を果たしている．父は当時自分で学問的な人生の目的を追求していたこと，[10]彼の開かれた性質と態度，彼の律義さと良心的であることはトレルチにとって手本となったということ，或いは彼は全く自然な方法で子供たちにとって世界への仲介者であったということ，このことは医者の活動において特に現われざるをえなかった．いやむしろ彼は子孫にとってあらゆる点において高いところにある出発点であった．輝やかしい才能を与えられたこの人は思慮深くそして愛情深くこの出発点を創造しそして守ったのであった.[11] ここから多くの方向へ進むことができた ——自然科学的・医学的研究の方向へのみではなかった：父の手本はむしろいろいろな要素をふくんでいた．つまり神学的思考へも容易に独立させられ，そして神学的思考において次に包括的に展開させられうる要素をふくんでいた.[12]

そして父の近親にすでにかかる方向への職業選択の発端が存在した．つまり彼の兄ルーイス（1821－1897）は神学研究を始めたのであるが，学問的批判的にたてられた宗教性の影響の下で後には中断したのであった.[13]

この伯父ルーイスは1875年54才で妻エリーザベトと共に健康上の理由からラウインゲンの近くのドーナウ平野の南の端の村アイスリンゲンの農場へ引っこみ，そして金利生活者として彼の貯えでつつましく生活したのであるが，[14]この伯父は彼の兄弟の子供たちに少なからざる影響を及ぼしたに違いない．農場へ引っこむことに関して年代記に次のように言われている：≪われわれに新しい楽園が開かれた．われわれ兄弟姉妹の一人或いは二人がこのすてきな伯父，伯母のところで数週間滞在しない休暇はなかったぐらいであった．雨の降る或いは寒い秋の日には室にあらゆる種類の娯楽があった．つまり美しい本，古い家族の想い出，非常に洗練された，芸術家によ

ってさえ高く評価された手腕で自らクレヨンを使用する伯父の指導の下での絵を書く練習，古代の考察，精神と心を刺激するようなおしゃべり，これらが静かな時間をあっという間に過ぎてしまわせた．天気のよい日には近所の農作業に参加し，耕作馬に乗ったり，或いは収穫物を山と積んだ車の上にのって村の中を通ったり，近所へ出かけたり或いは古いローマ時代の遺跡のある丘でローマ時代の出土品をさがしたり，掘ったり或いは硬貨やテラコッタを求めて古いローマ時代の道を歩いたりした．宝（とりわけ Sigyllen，アンフォラ〔古代ギリシャ・ローマの両取っ手付きつぼ〕，陶器の破片，〔古代ローマの〕勲章）の一部は今日ではアウグスブルクのマクシミリアン博物館の誇りである．われわれ子供たちの間で誰れが休暇中アイスリンゲンへ行けるかはいつもはげしい競争であったということは不思議ではなかった．≫

この伯父 —— ≪彼のめずらしく穏やかな，思慮深いそして精神的な人柄に家中が支配されていた≫ —— はナザレ派というセクトに属していて，そしてルール地方やヴィテンベルクに散在している信仰仲間の支配人として活動していた．[15]

トレルチの後の神学に対する広範な影響についての推測はここでは持ちだされない．殊に礼拝の並びに厳格な生活について，平和主義と成人洗礼についてのナザレ派の特別な見解はトレルチの神学において決してくりかえされていないので．もちろん成長しつつあるトレルチには部屋のなかで壁にかけられたパレスチナの光景が心に刻みこまれている，そして同時にトレルチははやくから十分に装備された図書室の神秘的な書物の読書にむかったであろう．恐らくトレルチはこの固有な信仰の魅力から簡単には逃れることはできなかったであろう．ところでこの信仰は彼の信仰とは少し違っていた．[16] それにもかかわらず存続している影響はむしろ一般的なものから出ていて，個々の特殊なものから出てはいないと思われる．一つの世界観は想像力と思考力の投入の下で，それ故に個性の徴候の下に，いかにして形成されるかということが伯父という人物において具体化されており，また一緒に体験されえたのである．アイスリンゲンの当時の農家においてトレルチは個有な刻印の綜合に出合ったのであった．つまり古代ローマ的なものが田園詩と，聖書的なものが教養ある個人的な宗教性とまねることのできない結合をしていたのである．若い〔トレルチの〕心情は直観的にこの綜合の制限されたものと任意のものをも把えようとした —— この若い心情はいずれにせよ移ろいゆく現実性を超越してそして最も好ましいものにひろげられるのを知った．そしてこの心情はこの拡大されることがかの精神性と，神学的確信の形成と関係があるかのような印象を獲得することができた．

≪兄の非常に豊かな才能が突然力強く開きはじめた≫のはこの頃であった．ニルンベルクの〔母方の〕祖父の新年の手紙は1881年の初めに≪ドイツ語とギリシャ語の祝賀の詩がその品のある古典的な形式と思想の高揚のために与えた深い印象≫を報告している．残念ながらトレルチの詩的才能のこの最も若いときの証拠は失なわれてしまっている，けれども1882年と1884／85年の手許にある詩が彼自身が詩の世界へ招かれているという思いをいだいていたことを認識させる．彼の環境が彼のかかる思いへの確信を強めた：≪広範囲な哲学詩が成立した．そしてこの哲学詩は家の友人たちの間で手から手へ渡り，そして早熟の豊かな精神への驚きをよびおこした．≫[17]

≪兄弟姉妹のなかで兄はすでにはやくから祖父によってトレルチ家に伝えられた十分に備えつけのある人形劇場での物語の語り手として，すばらしい上演の主催者として，或いはカーニバルの兄弟姉妹の仮装に際して，彼は独創的な才能を発揮した．≫

みかけたところ特に母は長男の創造的な才能の出現に喜こんでいた，そしてこの才能を彼女自身の家系のなかで培われたものとみなしていた．[18] この見方にはある種の根拠がある，何となれば博学な母の想像力は詩や小説において表わされた．それらは遺稿のなかに見出される．彼女の弟で，シュトラスブルク大学の近代語学の教授であるエーミール・ケッペルも小説と詩の一冊を出版した．[19]

自伝的に啓発的な，これまで注目されなかった論文においてトレルチは1893年彼のはやくからの詩的傾向を控え目に評価し，そして彼は次のように述べることによって公表した：≪近代の人格性の最初の有意義な活動は充実した心の若き膨脹，あらゆるもののそれ自身への関係，自分自身のあらゆる物への拡大である……これが自らを詩的才能ありとみなす方向へ若者をしばしば誘惑する若者の輝きでありそして栄光である．≫[20]

人々が若いときの詩的文書 —— それはトレルチの発展にとって重要な契機となっている —— にどのような評価を与えるか．上述の≪自分自身のあらゆる物への拡大≫の試みの故に自分の詩的才能の限界のみならず，詩的手段の限界への洞察もトレルチにはっきりとなった．主観的な表象以上のものを学問的手段はもたらすことを約束する．われわれが学問的手段に直観的な力を拒否する必要がない場合，それ故により狭い自然科学的方法に制限されない場合には，いよいよそうである．

1881年11月6日，それ故薬屋通りの≪地味で市民的だが，広々とした≫家での14年の後，家族は引越した，しかも古い乾草市のそばの≪誇り高きフィリッピーネ・ヴ

ェルザー〔1521－1580，皇太子フェルディナントの後妻〕の屋敷のすばらしき住居≫[21]へ引越した．

この住居の変更における重要なことは家族にとっては今や誰れにも明らかな社会的上昇ということに存したのかもしれない．しかし16才のトレルチは，その前の2学年1879／80と1880／81にフリードリッヒ・メッツガーの授業できわめて高い目標にむかってあおられていたので，[22]新しい住居のユニークなそして目立ったことをむしろフッガーの記念碑の明白な近さのうちに見たであろう．つまり家の戸口の向かい側にそしてどの窓からも見えるようにハンス・ヤコブ・フッガーの立像が石の台座の上に等身大以上の大きさで立っていた，そして碑銘はこの人を≪学問の促進者≫として称賛していた．[23]

この記念碑において16世紀のギムナジウムで非常に高く評価され，そして奨励された人文主義が明白に，他の生徒の場合以上に，彼自身の生活に近づかなかったか．政治と芸術，学問と経済といった異なった領域がこのルネッサンスの人物において統一されていないか．この人物はこの小さいアウグスブルクの地で大いなる歴史に関係したところのもの一切に集約された表現と一つの顔を与えてはいないか．[24]われわれはなるほどこの記念碑で≪学問≫という言葉が若い精神に焼きついたと考えるべきであるが，しかしこの学問の概念が16世紀の伝統への単なる結びつき以上のものを志向しているということも見逃してはならないであろう．[25]

ハンス・ヤコブ・フッガーの図書館員で，私設秘書は，1551年と1557年の間は，ヒェロニムス・ヴォルフであった．彼はアウグスブルクの最も著名な人文主義者とみなされた．1557年，アウグスブルクの参事会は聖アンナ・ギムナジウムの校長に彼を任命した．そして彼の精神とそこから発する構想とがこの学校の姿と歴史にきわめて持続的に影響した．[26]

ヴォルフの思い出は19世紀に，著名なるゲオルグ・カスパール・メッツガー（1801－1874）が≪ラテン語の伝記を捧げるほど校長としての偉大なる先任者に心をひきつけられた≫[27]ことによって，慎重にそして力強く復活させられた．どこまでトレルチがこの記念碑を自分自身に関係づけることができたか，またアンナ・ギムナジウムの精神がこの記念碑において何故に引き寄せられたのかを明らかにするために，この間の事情を簡単に説明しなければならない．

3年間の国民学校時代―― それについてはもはや何事もわからない[28]―― の後，エルンスト・トレルチは1874年の秋に，それ故G.C.メッツガーの死の年に≪聖アンナ・ギムナジウム≫に入学した．

この学校はメッツガーの下で≪まもなく専門家の一致した尊敬を受けるようになり，そして次第にすぐれた学校という名声を博した．そして特に古典語の学習における生徒たちの成績並びに紀律上の成果に関しては，聖アンナ・ギムナジウムは王国内の他のギムナジウムによってしのがれることはなかった．≫[29]

宗教改革時代の創設の故に，聖アンナ・ギムナジウムに―― 転変する運命にもかかわらず―― アウグスブルクのプロテスタンティズムにとってたえず最大の意義が付される．[30]印刷された年報から学校の歴史の詳細が推測される．年報が生徒数，名前，教材，先生，精神的運命と発展についての情報を与える．しかし年報はとりわけ目標設定の強制的という印象を与えている．ラテン語とギリシャ語にたくさんの時間が与えられるという形で古典古代の教材が巾をきかしている．[31]けれども同時に古典古代の教材がキリスト教教育に役立てられている．[32]

こういう目標への整備は，≪宗教≫の学科において本来的に新しい要素はつけ加えられる必要がないほどに，学校の意志のすみずみまで浸透している．なるほど狭い意味での神学的な材料は隔離された形式のなかで表現されるが，宗教的思考による支配は学校の現実性全体からもっと包括的に発している．

≪宗教によってはじめて古代の研究は美しい文学作品のむだな楽しみであるのみならず，或いは歴史の研究は好奇心や娯楽であるのみならず，真実への，道徳的真実への研究となる≫，と18才のアビトゥーア〔ギムナジウム卒業試験〕受験生のトレルチは1883年8月6日卒業式で彼にまかされた卒業式辞で述べている．≪宗教はギムナジウムを神聖にする．君たちはギムナジウムにおいて何を欲するか，と人々がわれわれにたずねるとき，われわれは<真実>と答えることができる．≫ 次の文章はわれわれを傾聴させる：≪もちろん懐疑はここでは他のところと同様しめだされてはいないが，かかる認識は主観的な方法でのみなされうるのであって，そしてそれ故相対性の仮定の支配下にある．今や不機嫌の時代であって，この時代にあっては思想界全体が無価値なものとなり，そして主観性の空中楼閣があっというまにくずれるように思われる．≫ この所感は人目につく，というのはこの所感は―― この場所で語られると―― 学校において≪真理への探求≫が行なわれる或いは少なくともとりかかられる原則に対する証拠となるから．つまりトレルチははじめから認識の問題と基本的な懐疑を宗教の現象方法として把握し，そして宗教の領域で議論しようとしたということに対する証拠となるから．

アンナ・ギムナジウムであの数十年間働いていた宗教の教師たちはこの学校の生徒であった人たち〔つまり卒業生〕であった．[34]フリードリッヒ・フライエル（1824－

1881, Abitur 1843）とフリードリッヒ・ベーク（1845－1914, Abitur 1864）もそのかぎりで当然のことながらこの学校の関心事と精神性を体現していた．最初の4学年間，毎月2時間宗教を受けもったフライエルについてトレルチの場合に何の説明もない.[35]

これに対してベークは1888年と1891／92年の履歴書にはっきりと強調されている：≪私は豊かな知識と暖かい信仰によって秀いでている神学者の宗教の授業を楽しく聞いた．彼は私に絶えず神学研究の方向を与えてくれた.≫[36]

ベークがこの人文主義的ギムナジウムの理想をどれほど自分の理想にしていたかを，われわれは彼の講演のそれぞれにおいて，例えば83年11月10日に生徒たちにむけられた講演において読みとれるであろう．そこで彼はとりわけ≪ドイツ全市の参事会員にあてて，キリスト教的学校を設立し，維持すべきこと≫というルターの文書を引用して次のように詳細に論じている：≪測りしれないほどの祝福をこの文書を通してわれわれ国民が受けた．この文書を通してキリスト教と古典古代との結びつきも決定された．主なる神自身がこの結びつきを欲した．神はあの大いなる宗教改革運動のはじめにルターと並んでメランヒトンを置いた．そしてそれとともにわれわれのギムナジウムが進むべき道を示された.≫[37]5年間この人――彼は1872年から1912年の間アウグスブルクの奉仕女の家（Diakonissenhaus）の運命を導かなければならなかった．そしてその繁栄は彼に負うている――がトレルチの先生であった，そして持続する影響が彼から発している．われわれがかかる影響を特定の教義学的諸見解の調停のうちに求めることができるかどうかを恐らくは徹底的な分析のみが明らかにすることができるであろう．何となれば最初の印象ではトレルチが広範囲に内容的に依存しているようには見えないからである．偶然によってベークのきれいに管理された準備ノートが保存されていた．どういうメランヒトン像を，どういう神学的基本概念を彼は生徒たちに教えたか，理性と啓示の関係が，宗教の本質が，いかに規定されるかを彼が生徒たちに教えたかをこのノートから伺い知ることができる.[38]トレルチは後には個々の点では彼の先生の見解を越えていくが，この純粋なそして温厚な神学者の，すばらしい大型の油絵を描くところのこの教養あるそして冷静な神学者の印象がとりわけトレルチの人格のなかに居すわり続けたであろう．そしてもしわれわれがトレルチの履歴におけるベークのきわだった様子を適切に評価しようとするときは，この視学官と彼の妻が1886年以来トレルチ医師一家と親しく交わったということもつけ加えなければならないであろう.[39]エルンスト・トレルチと交された手紙はもちろん発見されていない．

あの数十年間のアウグスブルクのプロテスタンティズムはまだまとまりのある叙述を見出していない．≪古い信仰の代表者と合理主義の信奉者とが対立≫していたというシェーマに従ってはアウグスブルクのプロテスタンティズムは把握されえない.[40]きわだってすぐれたそして指導的な人物こそが特に上述の様な二つの方向の綜合を体現するのである．ここではその特徴が近代思潮に対して無制限に開放的でありそして同時に聖書と信仰に対して断固として忠実であるところのキリスト教がみられるのである．19世紀終りにはこれまで注意された以上にこの神学者のタイプが一般に支配的であったようである．アウグスブルクの場合にはG.C.メッツガーと彼の息子たち並びにF.ベークが上述の党派〔古い信仰を代表する党派と合理主義を信奉する党派〕のかなたに立っていた．同じことがW.シラーが≪自由主義神学の最も重要な代表者≫と呼んでいる人についても言われうる．≪ユリウス・ハンス（1845－1931），彼は広い教養を持ち，また宗教的にも倫理的にもまじめな人で，すぐれた人格の持主であり，彼は牧師としての活動以上に影響を及ぼした≫[41]が，彼がトレルチが住んでいる教区を指導しており，そして1879・4・6，アンナ教会においてトレルチに堅信礼を施した.[42]

J.ハンスとE.トレルチの間にはある関係が存在したにもかかわらず，今日ではもはや探求されえない．しかし次のことは決定的である．若きトレルチがF.メッツガーやF.ベーク並びにJ.ハンスと直接交ったことによって，彼はアウグスブルクプロテスタンティズムの最も重要な人たちと知りあいになり，そして自分のものにしたということが前提されうる．われわれは彼の後の神学を専らこの根からのみ推論することはできないが，しかし逆に彼が彼の思考においてキリスト教の理解の点でアウグスブルクで用意されていたものを表現し，また大いなるものにするであろうということは認められる．そしてこのプロテスタンティズムが最も純粋に≪学校≫という，即ちギムナジウムという形をとったということは意義のないことではなかった．この学校の自然な，制限のない真理への努力はプロテスタンティズムの真の本質として現れることができたのであった．そしてトレルチは，彼が卒業の式辞で次のように言うとき，教養についての徹底的に宗教的に制約された理解をもっていた：≪まさしくこれ即ち人格こそギムナジウムの勉強が目指すものである．ギムナジウムは知識を与えるのではなくて，内実を与えるのである．ギムナジウムは何かを与えるのではなくて，何かにするのである．そして答えはわれわれが何を持っていくかではなくて，われわれが何になった

かである．そして答えは熱心に真理を求めることである．≫

1883年に卒業する32人のうち17人が神学の研究をしようと決心した．たくさんのシュヴァーベン地方の牧師の息子たちが通学しているアンナ・ギムナジウムにとってもこのことは異常に高いパーセンテージである[43]．もしかしたらここではルター生誕の400年記念に対して特別な成果があったのかもしれない．しかしトレルチの宗教的な性質がすでに学校時代に彼の周囲にはっきりと影響を及ぼした可能性があるとわれわれは考えるべきであろう．例えば≪ギムナジウムからの挨拶≫，つまりトレルチが1882年聖アンナ教会の全教職員の記念式典に携えて登場したあの詩は次の要請する節で終っている：

≪時代の動きは予測できない，
暗雲は遠くからやってくる，
誠実な信仰は衰え，
理想は多くの者には狂気と思われる．
だからわれわれは知の喜び，信仰の力を
保持する確かな感覚を身につけたい．≫

優秀な卒業成績に基づいて，≪もし彼が神学者になっていなかったならば≫[44]マクシミリアン奨学生に採用される権利を持っていたのだが．しかし神学が彼の場合基本的にそれ以外のものは考えられない選択であった．1888年の履歴書に彼はそのことについて次のように書いている：≪ギムナジウムを終えたあと，私は職業の選択について直ちに決心できなかった．というのは両親の願いは医学に進むことであったし，私自身の願いは神学に進むことであったから．両親の許可を待つために，私はまずアウグスブルクで1年間の志願兵として軍務に服した．同時にかの地の〔王立〕リキウム〔哲学的教育をするカトリック系の司祭養成単科大学〕に入学した．この時期に私は神学研究にむかう決心をした…….≫[45]

トレルチの教育史がいくらかの必然性をもってこの学問に流入する，しかも家族のなかで一つのふさわしい決断への道がひらかれ，そして決断がなされたが故に，特にそうである．つまりこの成長しつつある人〔トレルチ〕に特別な期待が示されることによって，彼は自分自身が皆の注目を浴び，そして自分の心の本当の気持を問われていると感じた[46]．≪その熱い心をもってあらゆる物事の中心点として現れた≫[47]若い人〔トレルチ〕はいわばこっそりとこの中心的な≪場所≫へ行くように指示されていた．というのは家族は，換言すれば能力と可能性の多様な姿をとり，分岐したそして探知されにくい編物は，普遍的なるものとの内的連関を確かめようと努めるからである．だからトレルチは基本的な生活圏で，諸状況を反省し，そして≪真理に対して熱心≫であるように自分自身が要求されているのを知った．そして彼は職業の選択において両親の希望に逆ったが―― 医学には，注意すべきことには，≪理論的にしか≫興味がもてなかったので[48]――，ひそかな両親の支持さえも確信できるもっと深い本能がそこにあった．

反省の課題が一度目ざめさせられ，そして受け入れられると，先に言及された≪あらゆる物の彼自身への関係と彼自身のあらゆる物への拡大≫[49]がみわたせないほどたくさんの実行さるべき使命（Bestimmung）を形成した．次に〔使命を〕貫徹するためにわれわれが都市と呼び，そして都市におけるすべての生きているものをたえず定義するあの未曽有の構造物が待っている．その構造物のなかで時間が空間的に体験され，過去が相並んでひろがる．時間が場所をさしづする．この場所は厳密に言えば無数の≪場所≫から構成されるので，それ故運動であり，そしてその点で想像的なものを指し示す．時間が人間を時間をつらぬいて動かすことによって，時間は≪歴史≫のなかで人間を動かす．時間は〔われわれに〕互いにふれあう諸現実をぼんやりと直観する≪自己≫を感じさせるのである．

家のドアと学校の机の間にトレルチの場合250 mもなかった．けれども彼はこの区間でのみ，真のひろがりに向って完全に度をすごすところの現実性を通過しなければならなかった．確に，記念碑と歴史的建築物は親しい名前と確固とした場所を持っていた．そしてそれらはたいていはよく知られたものの地味さを持っている．しかしかの成長する人〔トレルチ〕の自己が全くとるにたりぬ程度であれ問題或いはテーマになるやいなや，この関連が反省され，静かなる記念碑がその由来とその世界性に基づいて動きだし，その充実さと活発さのなかで≪自己≫が拡大され，そして新しく再構成される．

主観と現実性の間のこの不可避の交換，この継続的な交信はもちろん自己を思いあがって中心点におくことにしつこく反対している．明確に規定されうる関係はもはや簡単に個々に処理されえない大きさの程度と≪彼岸性≫〔相対性を越えたもの〕を獲得した．物事がその事実性と重さにおいて，その計り知れなさにおいて認められるようになればなるほど，≪人格性の詩的形成≫[50]がますます無邪気とならざるをえなかった．自己と現実性は，ずっとより普遍的であった．しかも同時に個体が関係させられるほどであった．

≪当時神学には，形而上学へ到るほとんど唯一の道ときわめて緊張した歴史的問題とがあった．そして，形而上学と歴史，これらは元来同時にかつ関係し合って私を魅了したところの確かに二つの緊張に富んだ問題であった．≫[51]〔荒木 訳6頁〕．これは後の，時間がたってか

らの文章である．この文章からは神学の決定が認識をめぐってどれほど格闘の末になされたかということがほとんど追跡されえない．

≪私は心が痛む．私はどこへ行くのか．
私の足もとが揺れている．
諸思想が渦まきながら私を追いたて，
諸思想の潮が私をのみこむ．
私はくずくずしながらほとんど私自身
を信ずることができない．
私は頭がぐらぐらする，
私はぞーっとしながら額に手をやる．
そして私はまだ生きているのかと私に
問いかける．≫[52]

形而上学は伝統的な知識の分野としてトレルチを魅了しなかったらしい．なるほどリキウムのベネディクト会の神父たちは伝統的な理解とは違ったものを教えなかったであろう[53]―― けれども上記の詩並びに卒業の式辞での該当する段落が，近代の主体的問題性がこの青年〔トレルチ〕に長く影響したということ，彼には哲学的形成も知られていなくはなかったということ，を示している．[54]

現存の根本からくつがえす懐疑に直面して≪形而上学≫に対する関心が現実的なるもの一般の構成にむけられたに違いない，[55] つまり前近代の諸見解を参照するように指示されなくとも懐疑に抵抗しうる物事と自己の事実性が同時に護られる認識論にむけられたに違いないのである．[56]

アウグスブルク時代のエルンスト・トレルチの精神的発展の詳細には決して追求されえないであろう．いくつかの明白な諸要素の枚挙でもって終わらなければならない．これらの諸要素はもちろん，彼の後の思考の歩みの独自性に説明がなされるように主張されるかぎりにおいて，注目されないままであってはならない．どう見ても，トレルチは家族，都市と学校のなかではやくにかかる人格的特色と彼の人生のテーマの決定的な表現化をも手に入れた．即ち彼は一切の使用できるものを同化することができた．そしてそのことによって危険におちいったり，特徴を失ったりすることはなかった．だからわれわれは彼がアルブレヒト・リッチェル，そして後にはマックス・ヴェーバーのような画期的な地位の先生や友人に対して一歩もひけをとらないのを見るであろう．悠然とした確実さが彼をしてかかる邂逅にたえさせたのであった．そしてその確実さは，彼の出発点がなるほど無限の特殊化に対する能力はあるが，気持をかえたり或いは背のびをしたりする必要はないという確信そのものにあった．

大学教授への道にはいるにあたってトレルチは目につく方法で彼がアウグスブルク出身であることを強調した．そして彼はそれでもって彼の努力のとり換えられない横顔を特徴づけたかのようにみえる．1891年2月14日教授資格取得の枠の中で行なわれたアウグスブルクの信仰告白の弁証についての講演は故郷の町と関係するのみならず，最初のゲッティンゲンでの講義要項に記された題目≪アウグスブルク信仰告白序説≫（1891／92の冬学期）も同じ自己感情を告げている．トレルチが彼のアウグスブルクに献げられた書物≪ヨハン・ゲルハルトとメランヒトンにおける理性と啓示……≫という書物を，その作品がきわめてぬきんでた地位を与えられてこの都市の宗教史に編みこまれている人に関係させたということはもっと高く評価されうる．メランヒトンの思想において彼は明らかに彼と彼の教育過程に影響を与えたすべての人たちの焦点を求めたのであった．この名前において，学校と人文主義，都市と歴史，プロテスタンティズムと形而上学，信仰と知識が関連することによって，メランヒトンを押さえることが自己に≪空間≫を与える現実性規定を約束したのである．[57] この現実性規定は≪危機の現代≫が教義学的基本問題のふさわしい解決へ導かれるための独立の貢献であった．[58]

原　注

1　医師エルンスト・トレルチは1832年12月9日アウグスブルク（Am Perlachberge, Haus C 251）に生まれた．そして後に彼の息子エルンストやルドルフが通ったのと同じ人文主義的な聖アンナ・ギムナジウムに通った．息子のエルンストは父にまさっていたと言われるが，父のエルンストも，学校の年報の報ずるところによれば，たえずすばらしい生徒であり，クラスのトップグループにあった．Abitur のあと彼は1850年にエアランゲン大学，チュリヒ大学並びにヴュルツブルク大学（後者はヒルヒョウのために）で学び，そして国家試験とニルンベルクでの最初の研修医のあと更にプラーグとヴィーン（1857年9月から1858年2月まで）の大学付属病院で研修した．1858年3月－1861年4月までアウグスブルクの病院で働いた．けれども彼の研修を完成するために3年間の地方勤務をしなければならなかった．この規定が彼をフュセンの空いているポストへむかわせたのであった．

2　今日ではもはや旅館として営まれていないが，今なお存在する．Tattenbachstraβe の Haus 21 がそれである．

3　以下に対する資料としてはとりわけ家族の年代記≪宮中顧問官の生活報告≫が役に立つ―― 宮中顧問官とはトレルチの父のことであり，この年代記はトレ

ルチの父自身の執筆に基づいて編集されており，そしてエルンストの弟ルドルフによって補われている．この手書きの年代記の信頼性は試みられた記録に関する調査のすべてが終始同一の日付を示していることによって証明される．この年代記の目標は父の伝記のためにむけられていて，そして父の死でもって終っている．その限りでエルンスト・トレルチについての報告は欄外にのみ現れる．それにもかかわらず彼の人生航路は主要な点ではたどられうる．殊に彼は父より5年しか長生きしなかったので．この資料は父の人柄と〔エルンストの〕子供時代の状況に関しては比類のないものである．5才年下の弟が兄弟姉妹の≪すばらしい少年期≫となったあの世界を愛情をこめて描いている．従ってあの過ぎ去った世界が色あいと輪郭をとりもどしている．トレルチの最初の数十年についてのデータがほぼ完全に欠如しているので，個々の点で利用できる一切のものを普及するように命令されているように筆者には思われる．

4　この馬は，自分の馬小屋へ急いで帰るために，最初歩きだすとすぐに父を投げとばしたので，のちには子供たちを再三喜こばせた．

5　1938年まで妥当した古い呼び名に従えば〔Haus G 332である〕．今日ではOberer Graben 11.

6　聖Ulrich――アウグスブルク――の洗礼名簿での記入によれば，この教団にKönigsbrunnの上述の副牧師が所属していた．

7　今日ではApothekergäßchen 6.

8　Meine Bücher, GS Ⅳ,S.3f.〔荒木康彦訳「私の著書」（創元社）5頁以下〕

9　父の兄弟であり，そしてエルンスト・トレルチの名付け親である伯父カール（1824－1893）は1854年Annastraßeで古い貴族の家（D220）を手に入れた．そしてそれを大商館にした．この家屋に≪1919年の会社の解散と売却に至るまで喜びにつけ，悲しみにつけ家族の運命が結びついていた……Gustav Freytagの＞Soll und Haben＜〔貸方借方〕に出てくるような高級な商館の原型は，ほとんど毎日おじさんのところか或いはお使いのために店に行くわれわれ子供にとっては，広い帳場．倉庫，貯蔵所，屋根裏，記録で埋まった館並びに高くつみあげられた食糧のストックのなかに，たくさんの喜び，秘密と体験を，そもそも無邪気に，臓していた，つまり子供心には忘れられない豊かなものを臓していた≫．

10　このことが父へのエルンストの祝賀の手紙から推測される（1884年12月）．

11　宮中顧問官トレルチの詳細な評価は彼の死後1917・10・8の≪アウグスブルクの最新報告≫に現われた．1902・12・9の彼の70才の誕生に際してアウグスブルクの夕刊はとりわけ以下のように書いた：≪何百もの家族がこのすぐれた医者を本当に尊敬して覚えている．彼は真実でかつ厳しい学問の基盤に足を置き，そして言葉の最も広いそして最も純粋な意味での人道性に支えられて，彼らに困難な時に救助と慰めをさしのべたのであった．トレルチが公的な福祉のきわめて種々なる領域であげた功績は無数にある．われわれが専ら想い出すのは，行政区並びにシュヴァーベンの医師会の議長として，医学上部委員会とドイツ医師議会の代議員として……救貧事業，自発的救護班に対するたゆまぬ活動である．≫――この人物の像を更に完全にするためには，彼の名前はシュヴァーベンの歴史協会の会員名簿にもあるということ，トレルチは1885年アルプス山岳協会に加入したこと，そして彼は長時間の研究旅行――1871年8月に彼は徒歩でアウグスブルクからインスブルックを経てザルツブルックへ行った．1885年と1887年にドロミテ・アルプス〔東アルプスの一部で，南チロルに聳える山塊〕へ行った――からいつもいっぱい詰まったスケッチブックを持って家へ帰って来たこと，が挙げられよう．われわれは彼並びに彼の息子エルンストに新しく建てられたアウグスブルクの山小屋（レヒタールのアルプス）の落成式の数日後宿泊人名簿で出会う（1885年9月13日の記入）ということは確に副次的であるが，父と子の関係ということに目をむけるとき，雄弁な事実ででもあるということはいわずもがなである．

12　≪私の著書≫において周知のようにトレルチは父が彼を≪医者にしようとし，そして早い時機に自然科学的観察と収集へむかわせた≫（GS Ⅳ, S.3）〔荒木康彦訳5頁〕と記述している．

13　≪神学者は家族のなかにはいない．それに対してたびたび娘たちが牧師のところへ嫁いでいった≫，とトレルチは1913年に書いている（Ernst Troeltsch. Briefe an Friedrich von Hügel 1901－1923, hg. von K.E.Apfelbacher und P.Neuner, Paderborn 1974,S.100）．しかし伯父ルーイスでもって一族のなかでの神学への傾向が予告されている．

14　それまでは，バルメンで並びに1864年以来アウグスブルクで商人として活動していた．

15　エルンスト・トレルチが≪社会教説≫においてこのナザレ派について述べているのは偶然ではない．事実われわれは≪このグループの信奉者である私の一人の近親者はゴットフリート・アーノルト〔プロテスタントの神学者にして詩人1666・9・5－1714・5・30〕

とベルレブルク〔ロタール地方の地名〕の聖書を含むありふれた神秘主義の文献を持っていた≫（GS I, S.900 f., 特に Anm 490)〔ヨルダン社刊トレルチ著作集第9巻116頁以下〕という表現においてわれわれはゼクテの章において伯父ルイスに出会うのである.

16 ≪それはそうとわれわれの家はクリスチャンホームであったが，教義的な或いは敬虔的な色あいを持ってはいなかったが，キリスト教的なしきたりを厳格に守っていた≫（Briefe an von Hügel, a.a.O. S.100)

17 トレルチが1882年アウグスブルクの聖アンナの教職員と生徒による300年祭の記念行事に発表した6節48行の詩が保存されている．手許にある後の詩は大学生時代のものであり，そしておそらく年代記に挙げられているものとは同一ではない.

18 母と息子の心の一致は，例えば，1893年6月8日の息子ルドルフへの物語り的な手紙において表われている．オイゲニー・トレルチ夫人はほぼ2週間ボンのエルンストのところに居た．エルンストの友人や知人を招待して知り合いになった．そしてエルンストと一緒にビンゲンとボンの間の名所へ出かけた．≪手短かに言えば，すべてがひたすら可能なかぎりで美しくそしてよかった，人生の思い出になった≫―― 母の関心は，合衆国からトレルチが彼の奥さんにあてた二通の手紙（1904年）が母によるコピーの形でのみ保存されているという事情にあらわれている．≪この精神的に高い女性〔母〕はいつも特にこの息子と結ばれているのを感じ，そしてこの意味でこの息子を彼女の後継者とみた≫と年代記に書かれている.

19 エーミール・ケッペル（1854－1917）は最初ミュンヘン大学助教授そして1897年にシュトラスブルク大学の教授になった．彼は≪英国のドラマの内面史の研究≫（Heidelberg 1906）を公刊した．上述の小説は K.F.Kck という匿名で出版された.

20 CW 1893, Spalte 568－578 の ≫Sudermanns Heimat≪ という ET のサインのある文章はトレルチのものである．この文章は1891年の書物のあとわれわれがこれまで知っている最初の出版である(Zitat Sp. 577).

21 戦争で破壊された家D29（今日 Philippine-Welser-Str. 13）は古い栄光のなかで建てられた．この家にオーストリア皇太子フェルディナントⅡの後の夫人が住んだ．―― 1887年11月にはじめてこの家の売却が向いの家 D284（今日 Nr.26）へ再度の引越しを強いた．エルンスト・トレルチはここへほんの訪問するかっこうでやって来ている．同様に後の住居（1890・1・31－1914・4：Kaiserstraβe 1，次に1917年10月まで Völkstraβe 28）にもやって来た.

22 アウグスブルクから来る人は誰れでも≪最も信頼できる知識の袋≫を持って来た.≪あそこには当時メッツガー教授が居た．彼は彼の生徒たちをわれわれ Ansbach の人間には知られなかった強さで精神的な仕事へと励ますことができた.≫こういう印象を例えば Christian Geyer はトレルチの3年前にアンナ・ギムナジウムを卒業した彼の学友 Theodor Bauer から受けている（Chr.Geyer: Heiteres und Ernstes aus meinem Leben, München 1929, S.60 を比較参照).

23 Johann Jakob（1516－1575）は1560と1564の間，フッガー家の運命を指導し，次に不運な市況のために引退し，そして大審院長としてバイエルン公に仕えた．彼の死後の名声は芸術保護と価値のある図書のコレクションにある．このコレクションを彼は最後にバイエルン公アルブレヒト5世に売却した．これが後のミュンヘン国立図書館の土台となった.

24 ルネッサンス時代の〔都市〕貴族の家は三角形の土地に一種の内部空間を形成した．そしてこの三角形の土地は角のところで通路へ通じていた．フィリッピーネ・ヴェルザーの家と並んでその記念碑をとりわけ Köpf 家の豪華な建物（トレルチの時代には守衛付きの都市駐とん軍司令官の邸宅）と1854年に建てられた都市と文化の歴史のためのマクシミリアン博物館がかこんでいた.

25 1857年のルードウィヒⅠによる記念碑の設立はマクシミリアン博物館の整備との時間的な関係のなかで行なわれた．その限りでこの記念碑には近代的な関心も働いている．つまり近代的な関心が≪歴史≫において包括的な現実的統合のようなものを期待した.

26 H.Wolf（1516－1580）はメランヒトンの弟子であった．そして特にイソクラテスとデモステネスが最も重要であるところの古代の著述家の翻訳者として名を成した．詳細なことは，K.Köberlin: Geschichte des Hum. Gymnasiums bei St. Anna in Augsburg von 1531－1931, Augsburg 1931, S.51－105 を比較参照.

27 Köberlin, a.a.O. S.294―― 伝記は≫Hieronymi Wolfii memoriae≪ というタイトルの下で4部(1833／1834／1841／1858）に出版された.

28 管区分割以来 Hallstraβe のドイツ学校は管区所轄となった．けれども問題となっている年の書類はもはや保管されていない．ラテン語学校へ移る前の最後の休暇に，1874年7／8月に9才のエルンストは彼の従兄弟（Otto Adam, 当時 Öttingen の Studienlehrer, Otto Bischoff, 当時医学生)とバンベルグ経由コブル

クへ旅行することを許された．この旅行について年代記には次のように書かれている≪父にあてた旅行についてのOtto Adamの手紙は，城砦のコレクションの観察に際して，エルンストは知識欲と理解によってコレクションの管理責任者をびっくりさせた，とつたえて来た．≫

29　1873年校長の交代に際しての参事官の講演から≫Jahresbericht der Kgl. Studienanstalt und des Kollegiums bei St. Anna in Augsburg für das Schuljahr 1872／73≪（Augsburg 1873）に付録として収められている（付録3頁）．

30　空間的にはこの学校は，この学校に名前を与えた教会のすぐそばに，つまり1518年ルター（教皇使節・枢機卿カエタヌスの審問）をかくまり，そしてこの都市における宗教改革の出発点であったかつてのカルメル会修道院のすぐそばにあった．

31　この学校は1874年以来5（それまでは4）ラテン語クラスと4人文主義クラスを経営していた〔下記でわかるように1～5学年がラテン語クラス，6～9学年が人文主義クラス〕．1学年ではラテン語の時間が7時間，ドイツ語の時間が6時間であった．第2と第3学年ではその関係は10：3であった．次にはギリシャ語が加わることによって，その後のクラスでは一様に，8(9)：2(3)：6であった．トレルチの文献において≫Meine Bücher≪（GS Ⅳ, S.3）からの≪おどろくほど少ない授業時間≫がしばしばとりあげられるので，正確な時間を報告しておこう：23（並びにX），23（並びにX），24（並びにX），27（並びにX），28（並びにX），35，35，37，34（下の5クラスでは体操，音楽，算数の時間が加算される）．

32　≪もし主が家を建てなければ……≫（S.15－20）というモットーの下での1840／41の年報のメッツガーの模範的な就任講演を比較参照せよ．そこでは綱領的に次のようにのべられている：≪キリストは，もし彼ら〔先生：H.Renzの注釈〕の活動を無駄にしないようにされるときは，彼らのなかで生きておられるに違いない．キリストの精神のなかで，キリストの力のなかで，彼らは働いているに違いない．キリストのうちには知恵と認識の一切の宝がかくされており，キリストへの信仰においてはじめて人間存在の意味と目的と価値が解明され，キリストからのみ一切の真の精神形成，純粋な，清い道徳，本物の，最も高貴なヒューマニズムが発するという生ける確信によって，キリストはあらゆる真なるものと善きものの源泉であるという言葉でもって，貫かれているに違いないのである≫（S.15）．

33　1885年の多くの節からなる詩がこの努力を印象的に証明している．ここにギムナジウムの卒業式辞で鳴らされたトーンが再びみられる．例として4連〔連とは数行の詩行からなる詩の構成単位〕が引用される．

≪いたずらに，ぎらぎらした輝きでもって
研究の鬼火がわれわれを照らすほど，
全体がますます暗くなる，
つまりこの世の生の根拠が．
研究すればするほど，日々，刻々と，
つまり時の新しい刻みとともに
恐ろしく，計りがたく増大する，
不可解の海が．

34　古代文献学者Friedrich Mezger――彼は同時に神学者として試験済みであった――については特別に論じられなければならないであろう．彼もこの学校を卒業した（Abitur 1850）．注22も比較参照せよ．

35　F.Freyer，1865年以来学科担任教師，は同時にアウグスブルクの聖ヤコブ教会の牧師であった．そこでは，彼の前任者としては，August Bomhardが働いていた．しかも教会を覚せいさせる意味で．恐らくFreyerは彼の後継者に義務づけられていた．

36　1888年に≪私は二人の先生Mezger教授と視学官Boeckhを通して私のその後の人間形成に対する一定の印象を受けた≫と述べられている．

37　この講演は，内閣がこの日に学校の礼拝を禁止したあとの重苦しい雰囲気のなかで行なわれた．≫ Rede für den Festgottesdienst des Gymnasiums bei St. Anna in Augsburg am Tage der 400 jährigen Jubelfeier der Geburt Luthers ≪, Augsburg 1883, S.10を比較参照せよ――1895・11・27の新しいギムナジウムの建物の落成式に際してBoeckhの手書きで保存されている式辞は同様に有益である．

紙面制限のため，原注38～58（400字結，約10枚分）は，次回投稿予定の翻訳ホルスト・レンツ著「ロッツェについての知られざる懸賞論文」（トレルチ研究1所収）の原注と合わせて掲載させて頂きます．

備考　前巻まで12回にわたって掲載して頂きました拙訳エルンスト・トレルチ著「キリスト教の教会と集団の社会理論」は，K.K.教文館より「キリスト教会の社会教説」のタイトルで出版される予定です．高野は古代・中世を担当し，昨夏訳稿を教文館に渡しました．長い間掲載して頂き，有難うございました．